

# 日本英語教育史学会 会報

## 310

2022 年 8 月 22 日

**HiSELT** *Society for Historical Studies of English Learning and Teaching in Japan*

日本学術会議協力学術研究団体 日本英語教育史学会

発行人 日本英語教育史学会 (代表: 田邊祐司)

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町 5562  
 県立広島大学 庄原キャンパス 河村和也研究室  
 tel: 0824-74-1727 fax: 0824-74-0191  
 e-mail: [membership@hiset.jp](mailto:membership@hiset.jp)

会費納入口座 (名義人: 日本英語教育史学会)  
 ゆうちょ銀行【振替口座】00150-3-132873  
 ゆうちょ銀行〇一九店【当座口座】0132873

学会公式ウェブサイト [www.hiset.jp](http://www.hiset.jp)

## 第288回研究例会報告

2022 (令和 4) 年 7 月 16 日 (土), 第 288 回研究例会が Zoom を用いたオンラインの形態により開催されました。参加者は 26 名でした。

例会では 2 本の発表が行われました。はじめの「自著を語る」では, 指定討論者に孫工季也氏 (京都大学大学院) を迎え, 提案者の下絵津子氏 (近畿大学) が『多言語主義に揺れる近代日本: 「一外国語主義」浸透の歴史』の発表を行いました。続く研究発表では, 拝田清氏 (和洋女子大学) が「<変則英語>を再考する」というタイトルでお話しされました。司会は全体司会が河村和也氏 (県立広島大学), 最初の発表の司会が上野舞斗氏 (四天王寺大学), 2 つ目の発表の司会が孫工季也氏 (京都大学大学院) でした。以下に出席者の感想を掲載しますのでご参照ください。(①は下氏及び孫工氏, ②は拝田氏の発表への感想, ③は会全体に対する感想です。



### <発表 1 の感想>

- ◆①英語偏重になっていく過程は学部の授業でも気になっていた内容でありまた自分の卒業研究にも関係性があると思うので是非読みたいと思いました。発表お疲れ様でした。(奈良の鹿)
- ◆①英独仏と列举しつつ, 英語以外の外国語のうち独語について論じる比重が大きく, 仏語についてはどのようであったかとの質問がありましたが, あわせて, 1808 年のフェートン号事件を受けて蘭通詞に対し, 幕府より発された幕命は「英魯語兼学」であったことから分かるように, 幕末期にあっては外国語中に一定の地位を占めていた露語についてはどのように理解すればよいのでしょうか。さらに, 戦前における外国語教育を論ずる際には, 旧制の中学校と高等学校とは両者間における接続性と分断性との 2 つの観点から分析する必要があるのではないのでしょうか。後者の主とする外国語によって文・理Ⅰ・Ⅱ・Ⅲとする区分はその上の大学との接続が重要な意味を持っており, 普通教育たる中学校とは平行的には捉えがたいように考えます。(Dragon)
- ◆①筆者が「多言語」を志向し, 「外国語」という言葉に慎重でありたい思いがよく理解できました。フランス語にせよドイツ語にせよ, 2 つめ以降の外国語を教えるとき, しばしば英語との対比が行われます。そこで立ち止まって考えてみたのですが, 私たち英語教師は英語を教

えるとき、日本語以外の言語を引き合いに出して教えることができるでしょうか。もしかすると、このことの延長線上に「多言語」が実現する鍵があるのではないかと、ということを考えながら、大変興味深くうかがいました。ありがとうございました。(Horse)

#### <発表2の感想>

◆②正則と変則との別を漢学にまでさかのぼって追究しようとするご発表でしたが、特に近代以降の英語(外国語)については、制度としての正則と変則、正則教授法と変則教授法、及びプロダクトとしての正則英語と変則英語というところを分けて論じないと、さまざまな要因が錯綜して收拾がつかない恐れがあるのではと思います。制度だけを見ても、[外国人]教師について韻学会話より始めるのが正則、[邦人]教官について訓読解意を主とするのが変則だとのみ理解していると、夏目漱石が通った東京府尋常中学校では、日本語でもって普通学を学ぶのが正則で、変則の方はもっぱら英語で教えたということ踏まえていないと、漱石の、自分は正則の方にいたから、英語はさらやらなかったとの回想に混乱させられることとなります。さらに、荻生徂徠の「唐音直読」にしても、唐音と言ったときに、この徂徠の時代の中国、すなわち清の時代の中国音というものを意識していたのか、漠然と中国語の音という意味で、古代に伝わった漢音や呉音を考えていたのか、もし後者であれば、それでは当時の中国の人たちと会話する力につながることは、文法も含めて、不可能だったはずであり、理念ばかりが先走っていたのではないかと考えます。この意味では、「直読直解」にしても、真っ直ぐに返り読みすることなく読み通し、日本語を介在させずに理解するというだけのことで、正確な発音を前提にせずとも、sometimes > ソメティメス > 「50%程度の頻度で以て」との概念、との手続きによって成立するはずで、徂徠の「唐音直読」論を分析する際には、「正則 vs 変則」の問題と「直読直解」の問題とに分かって両側面からのアプローチが求められるのではないかと考えるところです。(Dragon)

◆②制度的に「正則」と「変則」を区別したのは開成所あたりかと思います。一方、英語教育でよく用いられる概念上の区別は、異言語の音と文字を学ぶどの時代にも存在していたのではないかと、「正則」「変則」と呼んでいなかったにしても)、と思いながら、とても面白くうかがいました。明治期の独案内の書名に「正則」を冠したものが多くことから、言語教育の文脈でいう「正則」と「変則」は必ずしも対立するものではなく、両立が指向されていたとも言えるのではないかと、と考えています。(Horse)

#### <会全体に関する感想>

◆③今回3回目の学会参加になりましたが毎回、毎日が新たに知ることばかりでとても楽しく参加させて頂いております。現在はコロナ感染者数も増加しておりますが減少した際には是非対面での開催を心待ちにさせていただきます。(奈良の鹿)

◆③コロナの感染状況が戦慄を覚えるばかりの速さで第7波に入っており、対面での例会開催が遠のくばかりかと憂慮しております。オンライン例会の利点は認めつつも、やはり対面にてご発表をうかがえる日を待ち望むばかりです。(Dragon)

## 発表を終えて

下 絵津子 (近畿大学)

この度は、拙著についてお話しする機会をいただきまして、誠にありがとうございました。指定討論者の孫工季也氏(京都大学大学院)より、対象記事の抽出方法や考察した会議が政策決定に与えた影響力について等、示唆のあるご指摘・ご質問をたくさん頂きました。英語教育関係者が他の異言語に対してどのような価値を見出していたのかというご質問も、非常に興味深く受け止めております。

ご出席の皆様からも、漢文教育と外国語教育の関連性、学ぶ側の外国語学習に対する認識、そして、本書のタイトルにある「多言語教育」に込められたメッセージに関する質問等を通して、様々なご指摘を頂きました。心より感謝申し上げます。明治期の外国語教育では、異言語は移入すべき文明・文化と直結しており、国語教育と外国語教育との連携やことばへの意識を高める活動を教科の枠組みを超えて活用するといった、現在の教育で強調される観点は、政策上は見られません。一方で、現代の言語教育観に関連して言うならば、大学教育では、日本語が教授言語として十分に機能するまでは、学生たちが「複言語能力」を最大限に活用していたと考えられます。複数の異言語(例えば英語とドイツ語の両方)が使用される授業があり、学生側は自身の持つ様々な言語能力を駆使せざるを得ない状況にあったわけです。

外国語教育の歴史と現在に関する今後の研究について、様々な課題が提示される機会となりました。このような機会を頂きましたこと、改めて、お礼申し上げます。

---

### 発表を終えて：下絵津子氏に対する指定討論者として

孫工 季也 (京都大学大学院)

『なぜ歴史を学ぶのか』の中でリン・ハントは「過去の一部は、現在との連続性の感覚を維持するために保存されなければならない」と言い、「歴史研究はそのために重要となる証拠を提示しなければならない」と続ける(10)。

下絵津子氏の高著『多言語教育に揺れる近代日本』もまた過去と現在の連続性を明らかにした。私たちが抱きがちな、「学習すべき外国語の数は単一でよい」「外国語＝英語」という認識は、紆余曲折を経て過去のある時点に誕生し、現代へと連なっていたのである。

この「紆余曲折を経て」の部分が本書のもう一つのハイライトである。「一外国語主義」「外国語＝英語」が政策実施される中には抵抗が存在した。しかし、私たちは普段この抵抗を感じるものが少ない。故に先の認識を「普通」なものとしてより強固にしていく。この先、「英語＝限ルヘキカ」という問いを断絶させないために、「普通」に対する批判的な眼差しを維持するために、後続する者がさらなる証拠を提示しつづけなければならない。

指定討論者として「英語教育史学会に対して」を問うた。「英語教育に従事した先哲を英語以外の言語から見てみては?」。自分では思い付かなかった。私の言語教育研究観もまた揺れた瞬間であった。

## 発表を終えて

栢田 清 (和洋女子大学)

この度は第 288 回例会におきまして、発表の機会を頂き心より感謝申し上げます。今回の発表は「<変則英語>を再考する」という大きなテーマでの発表でした。やはりといいますか、時間配分も含めて、至らないところばかりが目立つ発表となりましたこと、ここで改めてお詫び申し上げます。それにもかかわらず、発表後に主に私信でコメントやご指摘を頂き、大変に有り難く思っております。竹中龍範先生からも多くのご教示を頂きました。たとえば、東京府立一中の創立当時の教育課程では日本語での教授が「正則」とされ、英語による教授が「変則」あったというご教示を賜り、早速当該の資料を入手して確認いたしました。ご教示に心より感謝申し上げます。また、同じく私信で孫工季也氏よりご質問を頂きました。ご質問の 1 つに言語文化教育観と言語文化学習観は表裏一体と説明されていたが、自分が教わった方法がよくなかったので別の指導法を採用するというような場合は、表裏一体のものと言えるのか、と言ったご質問でした。これは発表時に「教わったように教えることが多い」という当方の説明がミスリーディングであったと反省しております。「自分の教わった指導法がよくなかったので別の指導法を採用する」という場合、自身の学習経験に照らしてこのように学習すればよい [よかった] という判断が働いております。したがって教える際にはどのような教授法を採用しようとも「あるべき学習観」がまずあって、それが教育方法に投影されていると考えます。ただし、言語文化教育観であれ、言語文化学習観であれ、あまりに個人の体験に限定して議論するのは問題が多いことも確かです。孫工氏の的確なご指摘に心より感謝申し上げます。

---

### >> 事務局より

#### >> 事務局の「夏休み」について

8 月 15 日(月)より 9 月 9 日(金)まで、事務局の業務は電子メールで対応できるものに限りさせていただきます。この間に郵便・電話・ファクシミリ等をお寄せくださった方へのお返事は 9 月 12 日(月)以降となりますが、どうぞご了承ください。

#### >> 年会費の納入について

年会費の納入につきましては、これまでに多くのみなさまにご協力いただいております。ここに厚くお礼申し上げます。

過年度分の会費をお納めくださったみなさまに学会誌をお送りする作業に遅延が生じ、ご迷惑をおかけしております。今しばらくお時間を頂戴しますことをお詫び申し上げます。

## 『日本英語教育史研究』第 38 号 投稿論文の募集

2023 年 5 月に刊行予定の研究紀要『日本英語教育史研究』第 38 号への投稿論文を募集します。投稿締切は 9 月 30 日 (金) 23:59 JST です。投稿規程・標準書式に沿ってご投稿ください。

投稿先・問合せ先 (紀要編集委員会) [kiyo@hiset.jp](mailto:kiyo@hiset.jp)

## )) この先の研究例会・全国大会

- ◆ 第 290 回研究例会      2022 年 11 月 19 日 (土)      オンライン開催
- ◆ 第 291 回研究例会      2023 年 1 月 7 日 (土)      オンライン開催
- ◆ 第 292 回研究例会      2023 年 3 月 18 日 (土)      オンライン開催

→日程や場所は変更される場合があります。その際は会報およびウェブサイトでお知らせします。

研究例会での発表希望者は、(1) 発表希望月、(2) タイトル、(3) 発表概要 (100~200 字程度)、(4) 使用予定機器、の 4 点を明記の上、発表希望月の 3 ヶ月前の 10 日 (1 月発表希望であれば 10 月 10 日) までに日本英語教育史学会例会担当へお申し込みください。

Email: [reikai@hiset.jp](mailto:reikai@hiset.jp)

## )) 新入会員

- ◆ 長瀬 慶來 (ながせ よしき) 岡山県 京都大学大学院生・関西国際大学

## 日本英語教育史学会 第 289 回 研究例会

日 時： 2022 年 9 月 17 日 (土) 14:00~17:00

オンライン開催

研究発表

**多様性を促す教科書の在り方：  
高校英語教科書における国際理解**

末澤 奈津子 氏 (京都橘大学 [非])

【発表者から】本研究は、国際理解・多様性の観点から高校英語教科書の分析を行った。1990 年代の教科書で多数検出された英米の文化を伝える課が平成 31 年度版の教科書では消失し、当該の教科書では、実在する社会的偉業や功績を修めた日本人が数多く登場する内容へと変化した。次に、平成 31 年度版の教科書で学んだ学習者 (英語専攻群・非英語専攻群) の 100 名に質問紙調査を行

い、国際理解や多様性への寛容度を調査した結果、「人や友人をその出自で選んではいけない」と認識しているにも関わらず、「英語を学ぶのであれば、英語母語話者が良い」と矛盾した選好が表出された。

研究発表

## 日本における英語「発音と綴り」指導の歩み —スペリングブックからフォニックスまで—

平賀 優子 氏 (慶應義塾大学, 東京大学 [非])

【発表者から】日本には 100 年以上も前に IPA (国際音声字母) が導入されたが、教師・生徒双方に負担をかけると非難され、授業ではなかなか丁寧に扱われていないのが実情である。そこで、小学校英語必修化を受けて、発音と綴りがある程度規則的だという立場から、IPA を用いずに文字を読ませるフォニックスが注目されている。発音と綴りを関連付けて指導すること自体、その始まりは明治時代に遡るが、その指導の目指すところは旧態依然のままである。歴史を繙きながら考察していきたい。

参加費： 無料

問合せ： 日本英語教育史学会例会担当 ([reikai@hiset.jp](mailto:reikai@hiset.jp))

**EDITOR'S BOX** 新型コロナウイルスの話が続きますが、7~8月に陽性者数が急増し、全国の感染者数は一日に 250,000 人を上回る日が出てきました。お盆からまだ 1 週間で、勢いはもう少し続きそうな気配です。/昨年 8 月、秋田ではそれまでの累計が 1,000 を超えたと嘆いていましたが、今は 1 日 1,000 人以上 (最近では 2,000 人が目前に迫っています) がほぼ毎日続いています。/それでも「他県よりは少ないかな」と思ってしまうところに「慣れ」の恐ろしさを感じています。/これだけの陽性者数がいても今年は今行動制限がないため、お盆期間中に実家に帰省し、久しぶりに夏にお墓参りをすることができました。/実家に行く前と、帰ってきてから抗原検査のキットを買って自主検査をしました。結果は幸いなことに陰性だったのですが、簡易検査なので、まだ完全には安心できない状態です。/学校現場ではもうすぐ夏休みが終わりますが、児童・生徒が集まるときにまた学校でクラスターが多発しないか気になります。/下の 2 枚の写真は会報 307 に掲載した場所で撮影したものです。雪がないと道もかなり広く感じます。(若)

© 日本英語教育史学会会報編集部 (秋田大学 若有研究室 [geppo@hiset.jp](mailto:geppo@hiset.jp))

